

土 橋 遺 跡 VI

—平成4年度 緊急発掘調査報告書—

1993.3

株式会社 コジマヤ
静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は平成4（1992）年5月1日～平成5（1993）年3月31日に、袋井市小山七ツ合241番地他10筆で実施した「平成4年度 株式会社コジマヤ倉庫並び店舗兼事務所建設に伴う土橋遺跡発掘調査事業」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社コジマヤ（代表取締役 小嶋正雄）を委託者として、袋井市長豊田舜次を受託者として袋井市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査は、永井義博（袋井市教育委員会）が調査を担当した。
4. 資料整理・報告書作成は永井が早川保子（文化財調査員）の協力を得て実施した。
5. 発掘調査に際して、株式会社コジマヤの皆さんにはたいへんお世話になった。ここに記して感謝したい。
6. 本調査に関する事務は袋井市教育委員会社会教育課職員が行った。
7. 調査資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 発掘調査に至る経過	1
第2章 調査経過	1
第3章 調査体制	3
第4章 調査方法	3
第5章 地理的環境・歴史的環境	5
第6章 遺構の概要	7
第7章 遺物の概要	8
第8章 まとめにかえて	11

第1章 調査にいたる経過

土橋遺跡は、以前より弥生時代の集落跡として静岡県泉の遺跡地図にも記載されている著名な遺跡の1つであるが、全国的に研究者に注目されるようになったのは袋井バイパス建設工事に伴う事前発掘調査で多数の遺構・遺物を検出してからである。

さて、今回の調査は平成3年11月1日に岡コジマより袋井市小山地内で文化財の所在の確認依頼が提出され、11月5日に学会員 森井雅彦が同地を試掘調査し全城を埋蔵文化財包蔵地として確認したのをうけて、平成4年4月13日に発掘調査の依頼が教委あて提出された。

発掘調査	調 査 年	調 査 原 因 及 び 発 掘 担 当 者
第1次調査	昭和57年(1972)	バイパス建設に伴う造成工事 (発掘担当者 永井義博)
第2次調査	昭和58年(1983)	バイパス建設に伴う造成工事 (発掘担当者 永井義博)
第3次調査	平成59年(1984)	バイパス建設に伴う造成工事 (発掘担当者 永井義博)
第4次調査	平成2年(1991)	友田邸の新居建設工事 (発掘担当者 吉岡伸夫)
第5次調査	平成2年(1991)	太平住宅による土地造成事業 (発掘担当者 吉岡伸夫)
第6次調査	平成3年(1992)	岡コジマによる造成工事 (発掘担当者 永井義博)

第2章 調 査 経 過

平成4年5月1日 発掘調査委託契約締結!!。

5月12日～13日 仮設ハウス・トイレ設置作業。重機による表土除去作業。

5月15日 発掘調査開始。北区より掘下げはじめる。

5月22日 北区溝007で軒丸瓦片出土。

5月25日～29日 担当市職員研修のため現場は休止。

6月19日 北区の溝跡より山茶碗等が出土する。

6月22日 多数のビットを掘り続ける。

7月1日 ビットと溝跡がほぼ完掘してくる。

7月8日 写真撮影用清掃作業を開始する。

7月10日 北区・南区写真撮影完了。

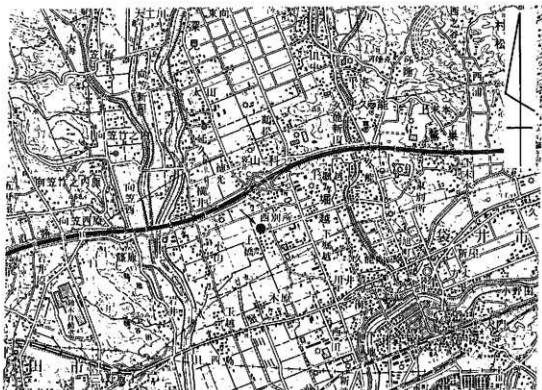
7月13日 現地調査完了。器材等の撤収作業。

7月22日～24日 現地遺構実測作業。

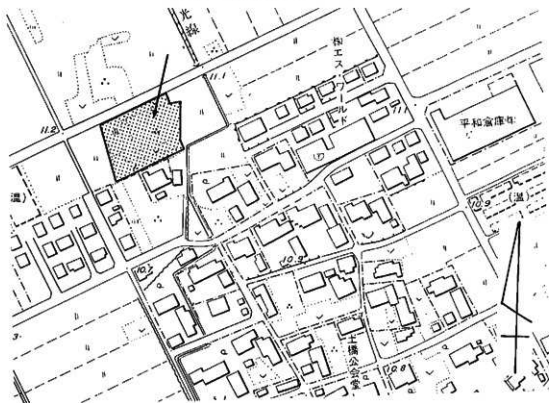
平成5年1月20日 発掘調査報告書原稿の入稿する。

3月25日 発掘調査報告書完成。

3月31日 発掘調査委託契約完了!!。



第1圖 土橋遺跡位置図 (1 : 50,000)



第2圖 発掘調査地 (1 : 2,500)

第3章 調 査 体 制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

調査実施機関 袋井市教育委員会

教 育 長	浅 井 通 男
社会教育課長	兼 子 春 治
課 長 補 佐	小 粥 保 夫
文化財係長	吉 岡 伸 夫
主任学芸員	永 井 義 博 (調査担当者)
主任学芸員	加 藤 理 文
主任学芸員	松 井 一 明
学 芸 員	白 澤 崇
学 芸 員	森 井 雅 彦
調 査 員	早 川 保 子
経 理 事 務	村 田 博 美
現地調査参加者	鈴木定雄 鋤木健哉 杉山兼一 鈴木武 大場力 大庭泰子 本多八重子 本多マサエ 山下悦子 船越スミ子

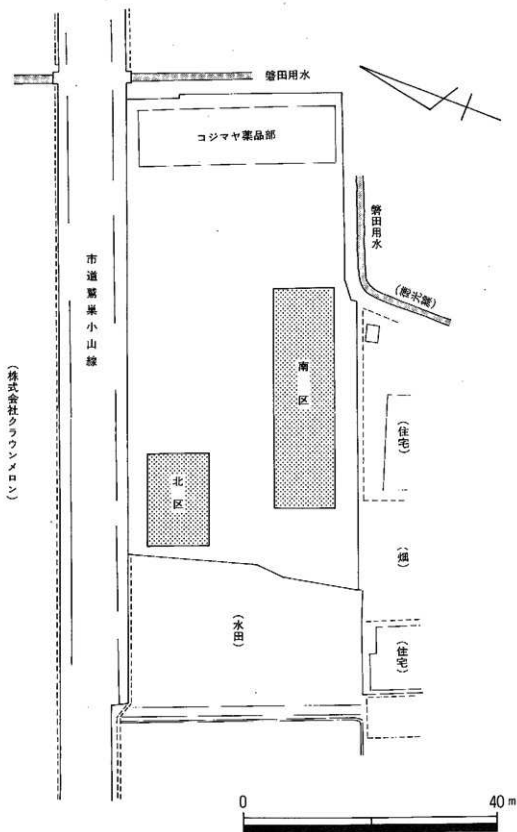
第4章 調 査 方 法

今回の発掘調査は、事務所・倉庫等の建設予定のみの発掘調査であり、また、試掘調査により土層がある程度わかっていたので、遺物の含まれていない上層は重機により排土作業を行い駐車場予定地に積み上げることにより北区・南区同時に発掘調査を行うこととした。

北区・南区は周囲をぐるりと排水溝を巡らせて遺構確認面に水の侵入のないようにし、調査区の角に排水ポンプを設置して壁からの水の侵入や雨水の侵入による遺構の水没を防ぐようにした。しかし、このような低湿地はやはり雨が降るとダメージは大きく、たとえシートが掛けられていても、翌日半日バケツと杓で水汲み作業を行う日もあった。

北区は比較的レベルが高く、調査は容易かと思われたが、南北に流れた溝跡が検出されて木製品の出土もあり、また井戸跡も思わぬところから検出され少々手間取った。溝跡は南区にも続く大きなもので土橋地区の昔の絵図等には記載されているものであろう。南区は調査区中央に残る大きな溝跡が排水溝の役を果たして比較的調査はやりやすかった。しかし、これも井戸跡が2ヶ所で検出され北地区の井戸跡同様崩れ易い遺構で時間をかなり費やした。

写真撮影のうち完了写真は、ローリングタローを立てて行い、カメラはモノクロ写真はマミヤRB6×7で、カラー写真はニコンF401を使用した。また、土質より乾くと白っぽくなるため遺構の状況が判りにくいため、石灰で白くマーキングをして曇犬に写真撮影を行った。



(株式会社クラウンメロン)

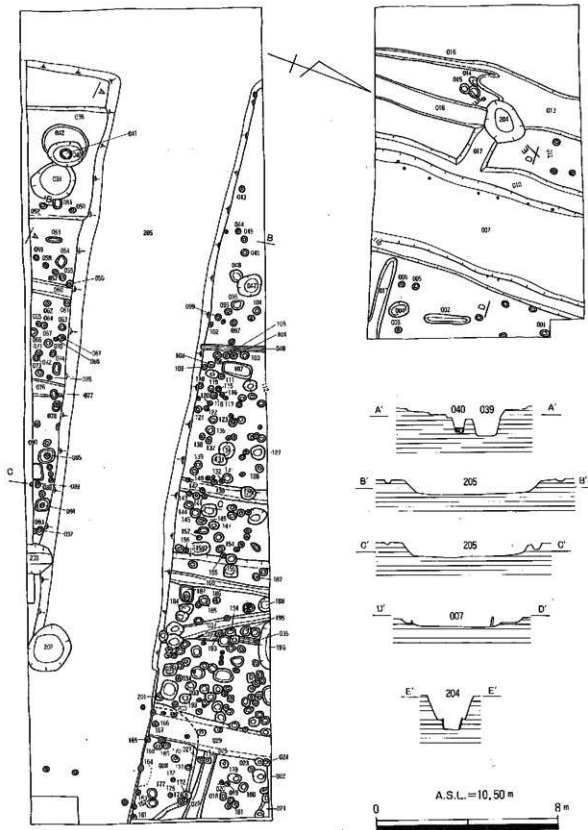
第3図 北区・南区の位置関係

第5章 地理的・歴史的環境

はじめに 土橋遺跡周辺の地理的環境・歴史的環境については、現在のところ1985年に袋井市教育委員会他より発行された『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財報告書 土橋遺跡―基礎資料編―』や1986年に磐田市教育委員会より発行された『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財報告書 玉越遺跡』が詳細である。それ以降の調査では、この周辺での新発見の成果は上がっていないので弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、自然化学的検討についての概要は詳しくはこの2冊の報告書を参考にしていただきたい。

歴史に「土橋」が登場 その中で、今回の調査で中心となって検出されている中世以降（鎌倉～安土・桃山時代）の遺物・遺構についてはいまだ解明されない部分が多い。つまり「土橋」にとっては中世は文献史学の上では暗黒時代と言えるだろう。ところで『袋井市史 史料編1 古代中世』によると「土橋」の文字が古文書に初めて登場するのは、永禄九年（1566）の「今川氏貞判物」（清見寺文書）からである。これは、9月3日に今川氏貞が天沢寺に寺領の安堵を行った文書で「遠州土橋」の文字が見受けられる。次は、永禄十二年（1569）に「徳川家康判物案」（宮永文書）のなかで正月十一日に徳川家康が中山又七の所領を安堵する文書の中に「山名庄土橋」の文字が登場してくる。徳川家康はつづいて同年十二月に熊野山史報院に土橋郷を寄進している。ところが天正元年（1573）になると今度は武田氏が和田川内守の忠節により所領を宛行する「武田朱印状写」（和田文書）に「遠州土橋之郷」の文字が見受けられる。

激動の地「土橋」 上記の古文書の記録より「土橋」は永禄九年（1566）の今川領に始まり、永禄十二年（1569）の徳川領から、天正元年（1573）の武田領、再び天正七年（1579）の徳川領と遠州地方を舞台とした戦国大名たちの盛衰を表す縮図とも言える変遷を遂げているのである。この渦巻く激流の中で歴史にその名を残すことなく、兵馬に踏み付けられながらもたくましく土橋の地に暮らした土豪衆たちの記録が最近の発掘調査の中から読み取ることができる。掘り出された中世 地行関係でしか文書に残らない中世の歴史を追跡からの出土品が改めて歴史の証人として時代を遡ることを可能にしてくれた。まず、国1バイパス関連の「土橋遺跡」の調査では現在の土橋集落の西端、熊野神社の南西方向から鎌倉時代（13～14世紀ごろ）の中世屋敷跡（S DB5）と獨立柱建物跡と井戸跡、埋め水堀跡が一群で検出されている。屋敷跡を囲む堀跡は幅3メートル、深さ70センチメートルの規模で、一辺33メートルで方形に巡っていた。また、同じ国1バイパス関連の「玉越遺跡」の調査でも竪溝屋敷跡と呼ばれる幅2メートルで一辺40メートルの外溝と、幅2メートルで一辺30メートルの内溝に囲まれて本屋・別屋・物置・上屋付井戸・隠居所などが想定できる建物配置であった。周囲を囲む溝のすぐ内側に跡跡などの遺構のあった形跡がないのは、出入口を除いて土塁が回っていたのであろう。時期的には12～13世紀とのことである。これらは、文書に残らない中世の土橋周辺の土豪たちの生活跡であり、これに今回の発掘調査で出土した遺物や、北方に位置する鶴松遺跡で出土した中世の遺物を加えると、中遠地方が華やかな戦国の世を除くで支え記録がだんだんに復元されてくるのである。



第4図 遺跡調査全体図

第6章 遺構の概要

(全体の概要)

今回の発掘調査場所は土橋の集落の北端の位置にで微高地から低地に降りるところで、これより北は遺構・遺物は希薄になる低湿地になって、小山の八雲神社周辺で再び遺物が採集される場所まで続いている。そのため、弥生時代・古墳時代前期・奈良時代ごろのいわゆる土橋遺跡を代表する遺構・遺物はほとんど出土せず、平安時代末～鎌倉時代から江戸時代までの出土品と遺構が中心である。

(北区の概要)

今回の調査で唯一文献史学の時期と重複しない遺構は001と呼ばれる弥生時代後期の直径50cm、深さ15cmの小ピットで菊川式の密形土器の頸部のみが出土している。

中世の時期では004の小土壇は陶器・土師器を出土する遺構で長軸90cm、短軸70cmを計る。これらの一括遺物からだけでは埋葬遺構なのか、廃棄された物を捨てる塵芥穴なのかはわからない。

北区の遺構の中心は007と呼ばれる溝跡で、杭列が両岸沿いに検出されている。この007は南区でも調査区中央に東西方向に検出されており、かつての土豪たちの屋敷を巡る堀跡が検出されたと考えられる。堀の底部より土器片に混じって軒丸瓦の破片が1点出土している。この堀跡は袋井市の1:2,500の地図にも明確に残っている程はしっかりとした遺構であるが、数回にわたって市利用されているらしく時期の特定は難しいと考えられる。堀が検出されたところでの計測値は幅5.50m、深さ0.50mで約1m間隔で堀の両岸に沿って木杭が打ち込まれている。

北区のほぼ中央で検出された井戸跡204は、少し崩れてはいたが井戸枠は四隅に建築材を転用した角材の杭を持つ正方形の柱目の板材が矢板状に並んで検出された。裏込めのジャリ上の中には石や陶器の破片が混入されており構築過程が良く判る。井戸跡内の土層の堆積は、廃棄後はらく放置された後に一気に埋められた状況であった。井戸を埋める時に行われる息抜き竹は発見できなかった。洪水のような状況で埋没し、人為的に埋め戻されたのではないかもしれない。井戸の計測値は、確認面での長軸2.20m、短軸2.50m、深さ2.40m、底部での一辺長0.72mであった。遺構は写真撮影後しばらくして土が力のバランスをくずして崩壊してしまったので井戸枠部分の詳細図は作成できなかった。その他、堀跡007に並行する方向に、溝跡016、018が検出されているが山上遺物も無く性格は不明である。

(南区の概要)

南区の大部分を占めているのが堀跡205である。これは北区では307と名付けた堀跡と同一で、先に述べた袋井市の1:2,500地図でも南北一連の遺構と確認できる。断面図を作成したB—B'ラインでは幅約5.60m、深さ約0.60m、C—C'ラインでは幅約6m、深さ約0.70mを計る。堀の東側の底にピットが検出されているが堀を渡るための簡易構造の横があったのかもしれない。これにより、北区の007と南区の205により中世の土豪の屋敷跡の可能性もでてきたと言えるかもしれない。この堀跡と並行するピット列も確認できる。

井戸跡は039、196、202の3基が検出されている。039は遺構確認中から見えていた038-040-041-042-050-051-052で構成される井戸であると考えられる。039と041は直接にはつながっていないが、039から汲み上げた水を040で使用した後に041を通してさらに地下の砂層を通過して再び039に戻るという構造になっている。041は丸く掘られた穴の中に曲げ物を入れて壁を支え、その中に木々端材を入れて、排水を通過する方法が取られていたらしい。そして、さらに砂層によって濾過された水として再利用されたのだろう。038は井戸端で使用した水がこぼれて周囲に広がることなく自然に堀に流れ込むように生活面とは一段低いレベルになっている。050、052のピットは井戸を覆う上層の柱跡の可能性を持つ。井戸跡196は調査区外に出てしまうので掘り方の一部しか調査できなかったがかなり大きな井戸跡と考えられ、井戸跡202は比較的良好な残存状況で方形隅柱型の井戸で鎌倉時代前半ごろのものと思われる。しかし、写真撮影後に井戸跡202は詳細図作成を前にして雨で水没し崩れてしまった。そのため掘り方の図のみの表記となった。

特殊な遺構としては、炭化物を敷き詰めたような土壌090がある。しかし、これだけではどのような性格の遺構かわからない。火葬遺構か鍛冶遺構のような火を使用するものであろう。

その他、南区では礎石、礎板を持つピットもいくつか検出されているが範囲が狭く、上屋構造を推定できるほどのものはない。

第7章 遺物の概要

出土遺物は検出された遺構が示すとおりほとんどが中世遺物であり、弥生時代、古墳時代の包含層は見えていない。いままでの「土橋遺跡」のイメージとやや異なる結果である。

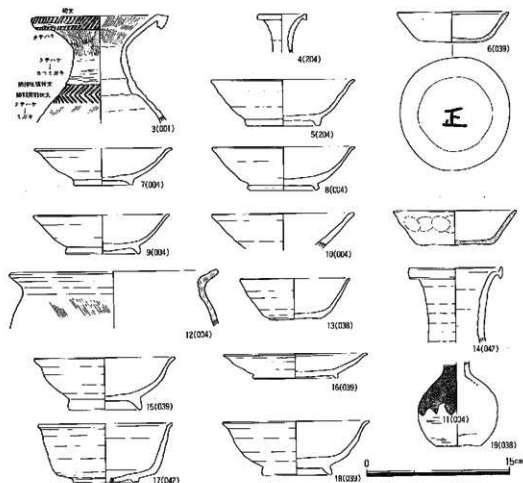
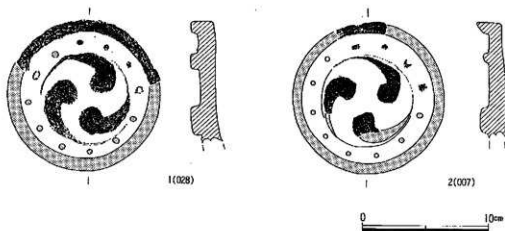
出土瓦・土器について 各遺構出土の代表的な中世遺物を第5図に紹介しておく。1、2は三巴文の軒丸瓦で胎土は白色でややもろく瓦の中心部は黒色である。まったく同じ胎土の軒平瓦破片（唐草文か）も出土している。鎌倉市内の寺院跡出土遺物にも同じ形態の瓦が見られる。

土器は3か唯一の菊川式土器の壺型土器で口径14.5cm、現存高11.2cmを計る。4～19は中世陶器で土師器は実測図の断面にスクリーントーンをいれてある。このうち6は「正」の墨書土器で坏の底部に書かれている。朱塗りの痕跡も一部に見られ祭祀用の遺物かもしれない。その他は灰釉陶器が多く、図示しなかったが白磁、青磁の破片も出土している。

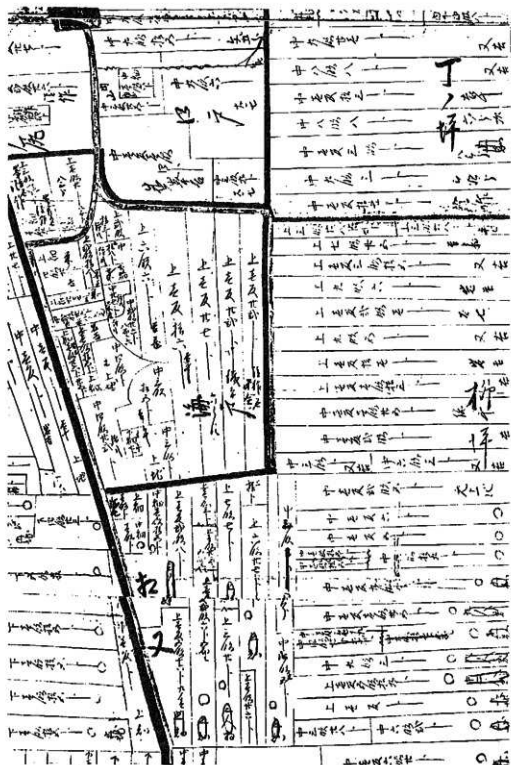
出土木製品について そのほとんどが中世の井戸跡202、204から出土した井戸枠である。一部には、建築材からの転用も見られる。井戸跡039に付属する濾過施設041からは曲げ物枠と内部に浄水用に木々端材が入っていた。また、結び川の桜の皮も出土している。

その他の出土遺物について 井戸跡202より時期不明の占銭や磁石などが陶器に混じって出土している。鉄製品も各遺構や包含層から出土しているが錆びてその形態を確認できるものはない。農具の一部と思われるか武器等が含まれるかもしれない。

出土の馬歯について 井戸跡039に接する流し場跡042から馬の歯（下顎）がまとまって出土している。日照りの時に雨乞いがこの井戸で行われたのであろうか。



第5図 出土遺物実測図 ()は出土遺物番号



第6図 土橋周辺の「海戸(カイト)」地名
 (国1)バイパス発掘で出土した中世屋敷にあたる)

第8章 まとめにかえて

今回調査した場所は袋井市小山地内で、今まで報告された「土橋遺跡」とは少し性格が異なっている。じつは、明治3年8月に作成された「山名郡上橋村田畑屋敷絵図」にも今回の調査地は含まれていない。これらの点より本来ならば本調査は別の遺跡名を付けた方がよいのであろうが、本調査についてすでに「土橋遺跡」としてあらゆる方面で使用されはじめていたため混乱を避けるために、引き続きこの遺跡名を使用する。しかし、遺跡名に関しても確認調査の段階での十分な検討を必要とする一例であろう。さて、調査の成果は次のとおりである。

- (1) 弥生時代・古墳時代・奈良時代後半のいわゆる土橋遺跡の主体となる遺構・遺物は本地区ではほとんど検出することはできなかった。これは、弥生時代に土橋の微高地の南側より開発が始まったと考えることができる調査例である。また、奈良時代の官衙（かんか）遺構は土橋熊野神社周辺の限られた地域のみに検出されたことになる。
- (2) 今回の調査で珠文を持った石巻きの三巴文軒丸瓦が5点と、軒平瓦破片3点が溝内やピット内から出土して、付近に瓦葺き（屋根の一部にでも瓦を使用した）の建築物が存在したことを証明した。位置は、今回調査しなかった駐車場部分であるのは確実である。鎌倉時代のものであろうが、詳細・断例等は不明である。寺院や祠（ほくら）のものかもしれないが、この時期の建物で瓦葺きとなるといろいろの絵巻物等を見ても都や国府周辺は別として地方の場面ではあまり見ることはできない。
- (3) 古磁、白磁、陶磁器小片が出土している。これらも瓦の出土と関係する資料である。
- (4) 南区の井戸039と付属施設である。041は興味深い構造をしている。いわゆる屋敷の「流し場」にあたるものなのだろう。これは、土橋の井戸が比較的浅く、水量もあまり豊かではないため、使用した水の再利用を考えたのであろう。井戸の形式としても、竿（さお）の先端に釣瓶（つるべ）を付けて汲み上げる「ふりつるべ」であろうか。041の中の曲げ物は「蒸籠（せいろう）」を転用したものかもしれない。その他の井戸はすべて鎌倉時代後半～室町時代のものである。大雨で水没して、詳細図をとるまえに崩れてしまったのが惜しまれる。なお、205と202の切り合いにより井戸が先行することが判る。
- (5) 柱穴跡はたくさん検出されているが、遺構内からの遺物がほとんどなく時期の決定に苦慮する。平坦地の調査面積が少ないので建物跡として完全復元できるものもない。
- (6) 土鍾や鉄滓、羽口片、砥石なども出土している。土鍾は投網に使用されたものか素焼きの小形のものである。製鉄関係の遺物より小鍛冶の行われた痕跡も残っていた。
- (7) 以上のような結果より、今回の発掘調査では鎌倉時代～安土・桃山時代に至る土豪の屋敷跡と、彼らによって祀られていた寺院跡等（祠か？）の一部が検出されたといえる。なお、ここで言う土豪というのは、いわゆる国人領主層より1クラス下の人々で、平時は農業経営を行い、戦の時は領主の元に馳せ参じて武將として戦う者たちであった。土橋、木原、新池あたりでは中世の屋敷跡を示す堀に囲まれた「カイト」地名が残る歴史上も重要拠点となっていたことを示すものである。（袋井市教育委員会 永井義博）

土 橋 遺 跡 VI

—平成4年度緊急発掘調査報告書—

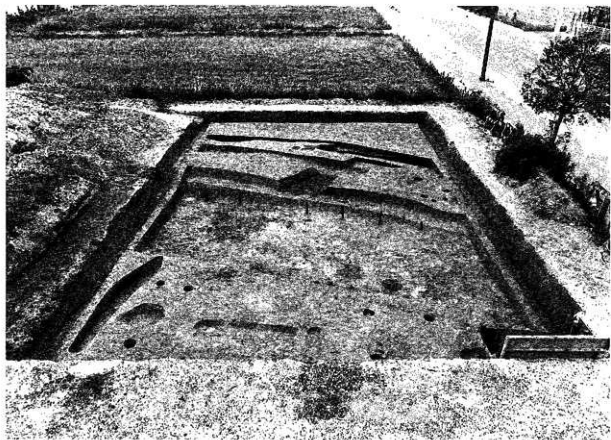
1993年3月25日

編 集 静岡県袋井市新堀一丁目1番地の1
発 行 袋井市教育委員会 ©
TEL 0538-43-2111

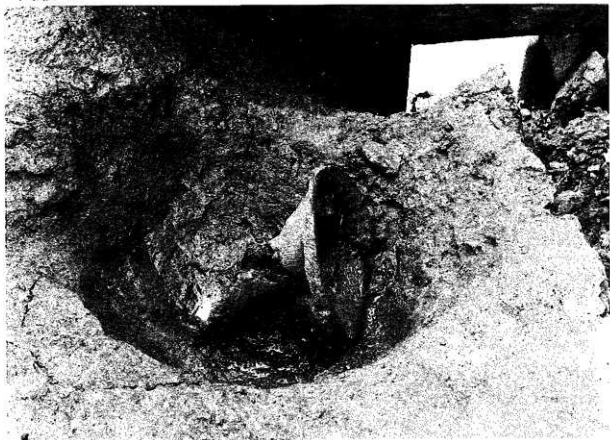
印刷所 浜松市中沢町1-1
株式会社 開 明 堂



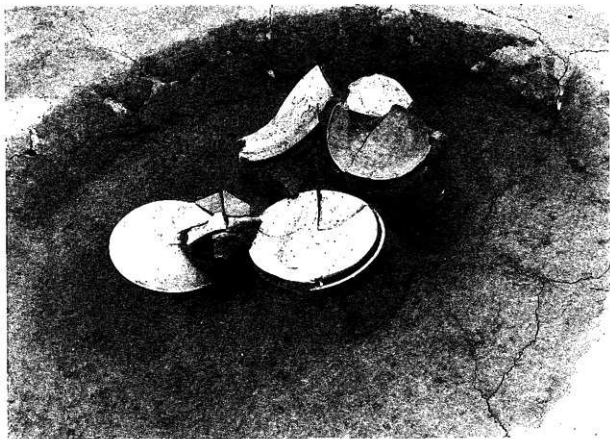
(1) A地区調査風景 (南より)



(2) A地区完了写真 (東より)



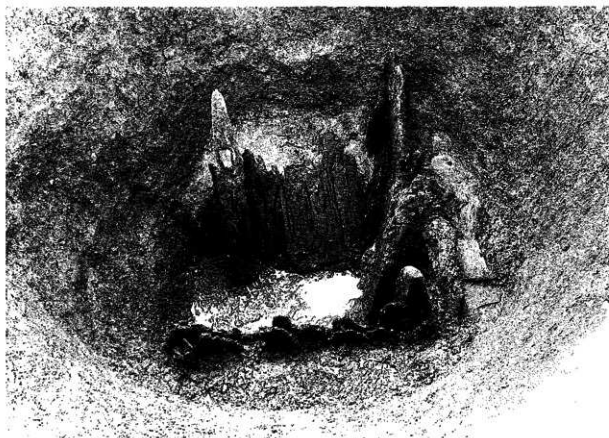
(1) 001遺物出土状況



(2) 004遺物出土状況



(1) 三巴文軒丸瓦出土状況



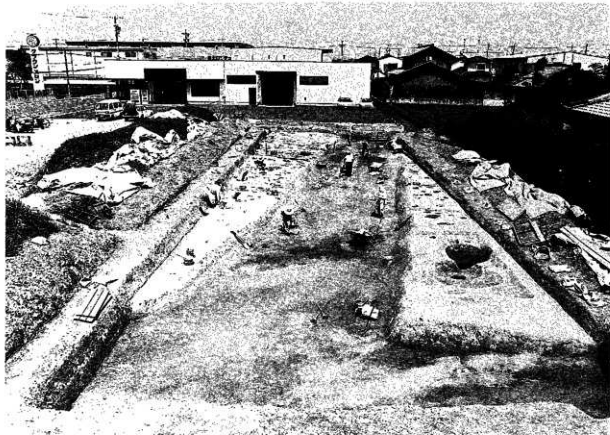
(2) 井戸跡 (204) 完掘写真



(1) B地区表土除去作業



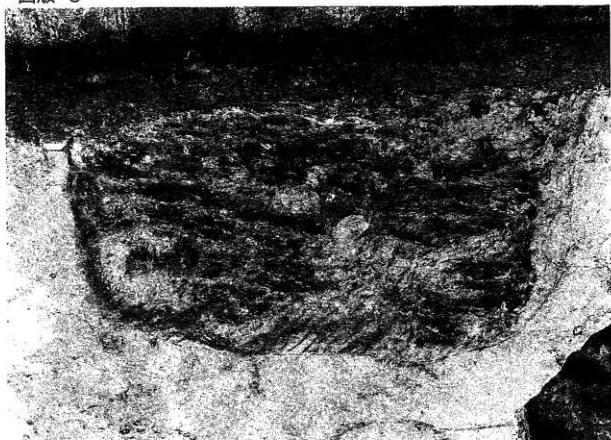
(2) 発掘風景



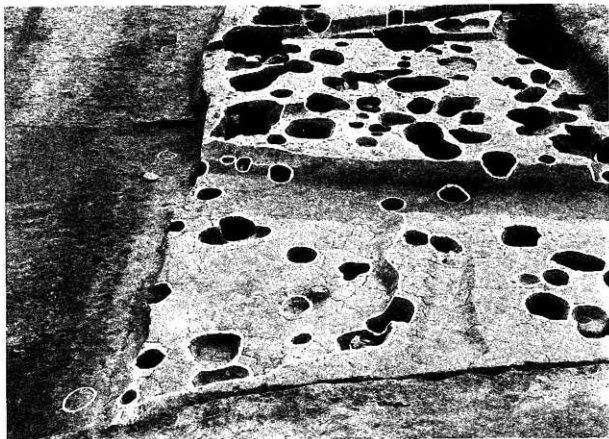
(1) B地区発掘風景 (西より)



(2) B地区完了写真 (東より)



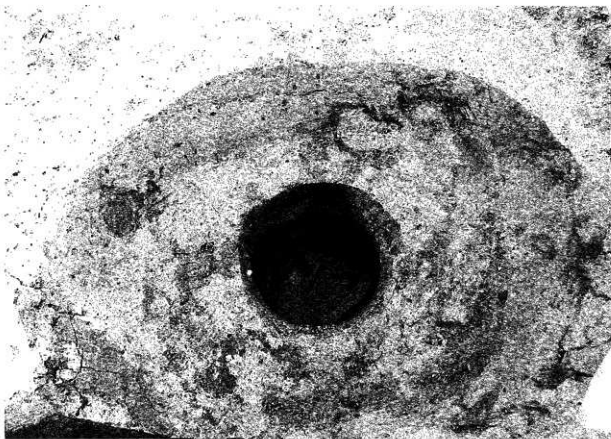
(1) 木炭を検出した090



(2) 住居跡 (028) の状況



(1) 井戸跡 (039) 完了写真



(2) 流し場の排水口 (041)



(1) 礫石を持つピット群



(2) 井戸跡(202)完掘状況